

[資料] 神奈川県秦野市での関東大震災の跡—さまざまな被害の記憶

小堀鐸二研究所* 武村雅之

Report on the Field Survey for the Memorial Matters from the 1923 Great Kanto Earthquake
at Hadano City in Western Kanagawa Prefecture, Japan.

Masayuki TAKEMURA,
Kobori Research Complex Inc., Minato-ku, Tokyo, 107-8502, Japan

Many memorial towers and monuments have been contracted for the heavy toll of life and for the restoration of villages or cities in Southern Kanto district. Death claimed a toll of about 105000 totally from the 1923 Great Kanto earthquake. These towers and monuments must be forever witnesses to the tragedy of the earthquake damage and spokesmen for the victim's dying wish "don't repeat such damages" However, most of them have been already forgotten by the citizens. We thought it's sacrilege and must use them for the public education of earthquake disaster prevention. This manuscript is a report on the field survey for the memorial matters from the Great Kanto earthquake at Hadano City in Western Kanagawa Prefecture.

Keywords: Memorial tower, Great Kanto Earthquake, Hadano City

§1 はじめに

武村・篠原(2010)は、神奈川県平塚市に残る関東大震災の慰霊碑や記念物などを訪ねて、今後の地域防災活動に用いる資料としてまとめた。今回はそれに引き続き、神奈川県秦野市に残る関東大震災の跡をたずねた。最初の調査日は、2010年7月19日で、地元の「はだの災害ボランティアネットワーク」代表の森清一氏の案内で、同ネットワーク所属の3人の方々とともに現地を回った。また、2010年12月18日に追加調査を行った。

秦野市は、神奈川県西部に位置し、面積は約104km²で、東西約14km、南北約13kmの広さをもつ。市域は秦野盆地を中心とし、北は1000m級の丹沢の山々、南はなだらかな渋沢丘陵に囲まれている[秦野市(1998)]。その大部分は、丹沢山地に源を発する諸河川の扇状地である。丹沢山地の東端にある大山の西側に源をもつ金目川は、盆地の東端部を流下し、その西側の二ノ塔、三ノ塔を源とする葛葉川は盆地の北縁部を、さらに西側の行者ヶ岳を源とする水無

川は盆地の中央部を北西から南東に向けて流れている。また盆地の南部には西から東へ室川が流れ、これらの河川は盆地の南東部に位置する秦野市中心部の先で合流し、金目川として一つの流れとなっている。その先、金目川は他の河川と合流して、平塚市西部で花水川と名を変えて相模湾にそそいでいる。一方、盆地の西端部には、塔ノ岳を挟んで行者ヶ岳とは反対側の西にそびえる鍋割山に源をもつ四十八瀬川が流れ、盆地の南西部を抜けて酒匂川へとつながっている(地形・地質の詳細は例えば秦野市教育研究所(1994)参照)。

そのため、扇頂にあたる盆地の北西部や北東部では比較的良好な地盤が広がっているが、丹沢山系の土砂流出の影響を受けやすい。一方扇端部にあたる秦野市中心部から見て南東の地域では、やや地盤が悪く、揺れの影響を受けやすい傾向がある。関東大震災でもこのような地形的な条件を反映して、秦野市全体を見るとさまざまな被害が発生し、慰霊碑や記念碑から、それぞれの地域の特徴を知ることができる。

* 〒107-8502 東京都港区赤坂 6-5-30
電子メール: takemurm@kajima.com



図1 秦野市内の主な河川，鉄道，道路と調査地点

Fig.1 Map of the Hadano city area and locations of survey points

§2. 当時の秦野と被害

現在の秦野市は、1923(大正12)年の関東大震災当時、秦野町以下6村からなっていた。具体的には、大根村、東秦野村、南秦野村、北秦野村、西秦野村、上秦野村である。このうち、上秦野村以外は、秦野町を含めて中郡に属し、上秦野村は足柄上郡に属していた。秦野市では、現在でも旧町村の名残が残り、旧秦野町に当たる地域を本町地区、以下それぞれ、大根地区、東地区、南地区、北地区、西地区、上地区の合計7地区に区分した地域分けが行われている。地形との関係でみると、扇状地の扇端部にあたるのが、本町・大根地区、渋沢丘陵に添って流れる室川沿いが南地区、扇頂部に向かって東部の金目川沿いが東地区、葛葉川沿いが北地区、水無川と四十八瀬川に挟まれた地域が西地区、四十八瀬川の西側が上地区である。図1は、秦野盆地の地図である。主な河川と鉄道、道路と各地区のおよその位置が示されている。また黒丸は、本稿で調査対象とした地点である。

被害の状況を概観するために、上記の1町6村の

被害統計の一覧を作成した(表1)。データは諸井・武村(2004)によった。諸井・武村(2004)のデータは、被災地全域をカバーする震災予防調査会報告の100号甲と内務省による大正震災志のデータを総合的に判断して作成されたものである。住家全潰率は大根村が飛び抜けて大きく、その分死者数も多い。扇状地の扇端で地盤が悪い地域が多いためだと考えられる。また、詳細はあとで述べるが、秦野町では大規模な火災が発生し、271戸が焼失した。これに対して、丹沢山地に近い東秦野村や西秦野村では、山地や扇頂部で比較的地盤がよいところが多く、住家の全潰率は低いが、東秦野村や北秦野村で流失・埋没家屋があることから分かるように、土砂災害が発生した。秦野市内の被害の特徴をまとめると、中心部の本町地区は火災の影響が大きく、南東部の大根地区は揺れによる家屋の倒壊、その他の東、北、西、南、上地区は山崩れによる直接、間接の被害を受けたところが多い。具体的には、個々の地点の説明でより詳しく述べる。

表 1 秦野市1町 6 村の被害のまとめ[諸井・武村(2004)による]
Table 1 Summary of damages for old municipalities in Hadano area.

	人口	世帯数	全潰	全潰率%	焼失	埋没	死者	備考
秦野	10075	2053	556	27.1	271		21	
大根	3678	607	329	54.2			59	
南秦野	4343	733	183	25.0			27	
西秦野	4729	838	129	15.4			17	
上秦野	1976	345	71	20.6			4	
北秦野	3149	518	127	24.5			16	
東秦野	4510	728	129	17.7	1	14	31	18人流失埋没
合計	32460	5822	1524	26.2	272	14	175	

* 上秦野村だけが足柄上郡、他は中郡

§3 調査地点

調査地点は図 1 に示すように以下の 10 地点である。

- ① 河原町児童公園の供養塔(本町地区)
- ② 古峯神社(本町地区)
- ③ 龍法寺供養塔(大根地区)
- ④ 玉伝寺供養碑といとこ地蔵(東地区)
- ⑤ 太岳院本堂再建寄附者芳名碑(南地区)
- ⑥ 震生湖畔寺田寅彦句碑(南地区)
- ⑦ 平沢埋没者供養塔(南地区)
- ⑧ 菩提復旧記念碑(北地区)
- ⑨ 戸川復興記念碑(北地区)
- ⑩ 堀之郷正八幡宮復旧記念碑(西地区)

なお、秦野市は市内にある記念碑について調査し、その結果は秦野市(1987)にまとめられている。風化がすすみ碑文が読みにくいものなどは、この資料を参照した。一方で、この資料の記録に誤りを見つけたものについては、そのむねを(注)として記載した。

(1) 河原町児童公園の供養塔(本町地区)

所在地の現住所は、秦野市河原町 1 番地で、玉寶山命徳寺(天台宗)に隣接する児童公園の一隅に図 2 のような大きな慰霊碑が建っている。碑には以下のような碑文が刻まれている。

(正面) 関東大震災歿死者供養塔
日光山輪門跡貫主僧正徳順敬書
維時 昭和五年九月一日

(裏面) 秦野一町五箇村 大正大震災歿死者
以下、町村毎に歿死者の氏名が記載されている。
人数は以下の通りである。

秦野町 60, 東秦野村 29, 北秦野村 16, 西秦野村 29, 南秦野村 28, 大根村 62, 合計 224 名(なお最後の 8 名は行間をとって記載されているが、大根村に加えた)。

さらに、「供養塔建立世話人」として、町村毎に氏名が記載されている。順序通りに人数を記載すると以下のようなになる。秦野町 25, 東秦野村 12, 北秦野村 13, 西秦野村 20, 南秦野村 15, 大根村 13, 秦野町 40, 合計 178 名。そして最後に以下のように刻まれている。

建立發願者 秦野町 乾サダ 秦野町 平井政五郎 玉寶山主 多田孝誠
賛助 湘南佛教會
天野守之助 刻

(注) 秦野市(1987)に記載された碑文では、正面の日付の前にある「維時」の 2 文字が抜けている。



図 2 河原町児童公園の供養塔

Fig.2 Memorial tower in Kawaramachi Park in the Honcho area.

1930(昭和5)年に建立されたもので、秦野1町5ヶ村での犠牲者の名前が刻まれている。同行した「はだの災害ボランティアネットワーク」の一人の方の祖父の名が刻まれていることも分かった。また(7)で説明する震生湖形成にかかわる市木沢の崩壊地で生き埋めになったとされる少女2人の名も南秦野村の犠牲者の中に確認できる。

この碑の犠牲者の中に、上秦野村の犠牲者が入っていないのは、所属する郡が異なることからわかるように、以前は1町5ヶ村で秦野地域がまとまっていたことを表している。表2にこの慰霊碑に書かれている各町村の死者の数と表1の数を比較する。表1で採用した諸井・武村(2004)のデータを資料1とする。秦野には、1925(大正15)年発行の『秦野誌並に震災復興誌』という震災誌がある[落合(1925)]。この中に、「震災に直面して」と題して、震災当時の秦野警察署長の朝岡朝吉が残した地震直後の9月1日から9月7日の活動記録が掲載されている。その最後に被害の集計が記されている。集計は1町5ヶ村の他に、齊ヶ分三谷という区域がある。警察署の管轄区域が町村区域の中でさらに複数に分かれていることはよくあることである。現在も齊ヶ分(さいかぶん)駐在所はあり、その位置は大根地区にあることから、齊ヶ分三谷の集計を大根村の集計に加えて、資料2として表2に入れた。朝岡朝吉による警察署のデータは死者と行方不明者が区別されているが、資料2ではそれらを合計した。

資料1と資料2のデータは、大根村を除き比較的良好な数値を示すが、慰霊碑のデータは秦野町と西秦野村で両データに比べてかなり多い。特に秦野町では40名近くも上回っている。なぜ、行政や警察

の集計と慰霊碑に名前が書かれた犠牲者の数が異なるのかは分からない。資料1のもとになったデータや資料2のデータの集計時期は、出版時期から考えて、少なくとも震災後2,3年以内、おそらく数ヶ月以内にまとめられたものである。いずれも慰霊碑の建立年に比べてはるかに早い時期である。しかしながら、その間に多くの新しい死者が判明したとは考えにくい。行政や警察の集計は原則として震災時にその場所に暮らしていた人々の犠牲者であるが、慰霊碑の死者は他所で暮らしていて犠牲になりその後里帰りしてきた人々を含むと考えるのがよいかもかもしれない。

(2) 古峯神社(本町地区)

古峯(ふるみね)神社は、秦野の中心、本町四ツ角の北約250mの曾屋みちと呼ばれる通りに面したところにある。この地域は下曾屋とよばれていた。図3に神社の写真を示す。現在の住所は秦野市寿町3番地である。

この神社は、震災の際に発生した火災が、当時石田家の屋敷内に祭られていた古峯神社の所で鎮火したということで、1926(大正15)年に社を再建し、町内の神社としたという。神社の正面右にある説明板には、震災後「火伏せの神としての御神徳が広く知れ渡り、地元では信仰というより畏敬の念となり、地域の守り神として根付いた」と書かれている。

図4が秦野町での火災の様子である。本町四ツ角を中心に、北東-南西に約200m、北西-南東に約400mを焼失した。焼失区域は1996(平成8)年の調査結果[秦野市教育研究所(1998)]を書き写した。

表2 慰霊碑の死者数と他データの比較

Table 2 The number of dead from the memorial tower compared with other data.

	資料1	資料2	慰霊碑
秦野	21	21	60
大根	52	63	62
東秦野	31	30	29
南秦野	27	28	28
北秦野	16	11	16
西秦野	17	17	29
合計	164	170	224

資料1: 諸井・武村(2004) 資料2: 「震災復興誌」
慰霊碑: 河原町児童公園



図3 古峯神社

Fig.3 Furumine Shrine in the Honcho area.

『秦野誌並に震災復興誌』[落合(1925)]によれば、火災の発生は地震から20分後で、乳牛(ちゅうし)の一角からで、火の見柱の警鐘が一斉に乱打されたが、水道が破損するなか、住民は自家の被害や家族の安否確認におわれて火元へかけつけるものはごく少数であり271戸を焼失する大火となったとある。

さらに『大正震災志』上巻[内務省社会局(1926)]によれば、出火時、折悪く「南西の強風の為め、字乳牛より字大道上宿に延焼し、町の中央四辻に延焼した際、風向変じて北東方の風となり、後又西南風に変じ、片町より、中宿・下宿・下曾屋に延焼し、一万七千五百坪の地域を焦土と化して、二日午前二時頃鎮火した。」という。『神奈川県下の大震災火災と警察』[西坂(1926)]にもほぼ同様の記載がある。現在も残る地名をたよりに上記の記述にそって火災の延焼の様子を図4に矢印で示した。古峯神社が下曾屋方面の延焼地域の縁に位置することがよく分かる。

秦野市(1977)によれば、震災の教訓として秦野町では以下のことが行われた。その第一が水道の鉄管化である。秦野町には、1890(明治23)年竣工の日本で2番目に古い曾屋水道と呼ばれた水道があったが、陶管水道であったために地震でもろくも破壊し、震災時の火災には有効にはたらかなかった。その反省から復旧は鉄管で行い、消火栓も大幅に増設した。また、焼失地域では道路の拡幅が実施され、1926(大正15)年には県道の上宿から下宿通りが、ついで大道通りが拡幅され、その後も市街地道路の整備が行われた。



図4 秦野町での火災の延焼域と古峯神社

Fig.4 The area of fire spread in Hadano and the location of Furumine Shrine.

(3) 龍法寺供養塔(大根地区)

曹洞宗亀谷山龍法寺の現住所は秦野市南矢名1533番地で、秦野市南東部の大根地区にある。亀谷山龍法寺と刻まれた石柱の門を入ると、本堂へ向かう途中の木立の中に高さ1m位の慰霊碑が立っている(図5)。碑には以下のような碑文が刻まれている。

(正面) 震災歿死者供養塔

その下に 男性2人、女性4人、子供2人の合計8人の戒名並びに近親の生存者名とその続柄とが刻まれている。

(裏面) 瓜生野一同

昭和十年九月建立

瓜生野(うりゅうの)は龍法寺の周辺地域の大根村大字南矢名に属す旧小字(集落)である。周辺住民が震災で亡くなった同じ集落の8人の13回忌に建立したものと思われる。西坂(1926)によれば、地震による揺れの被害は、秦野町の東南に位置する地域で甚だしく、弘法山を挟んで大根村の南矢名と反対側にある東秦野村の名古木(ながぬき)や隣接する大根村の真田や北矢名の民家は悉く倒潰したとある。南矢名でも家屋の倒潰が相当数あったものと推定される。なお、大字真田は1955(昭和30)年に隣に金目村に編入し、現在は平塚市に属している。



図5 龍法寺にある供養塔

Fig.5 Memorial tower of Ryuho-ji Temple in the Oone area.

(4) 玉伝寺供養碑といとこ地蔵(東地区)

曹洞宗石源山玉伝寺の現住所は、秦野市名古屋 1290 番地で、弘法山の北、秦野市の東地区にある。墓地の入り口付近に高さ 3m位の慰霊碑が建っている(図 6)。碑には以下のような碑文が刻まれている。

(正面) 関東大震災歿死者供養塔

台座に「総檀中」とある。

(裏面) 大正十二年九月一日午前十一時五十八分
その下に「名古屋」として 13 名、「落合」として 5 名の犠牲者の氏名と年齢が書かれている。さらに、最下段に以下のように刻まれている。

発起者 念佛講中 寺世話人一同

玉傳十四世覺林代

昭和二年九月一日建之

名古屋は玉伝寺のある地域、落合はその隣のいずれも東秦野村の大字である。『秦野市史』通史編 3 近代[秦野市(1992)]によれば、東秦野村では震災前学校が 3 つに分かれていたが、東小学校として統合するために解体がはじまり、震災時には寺や公会堂で授業がなされていた。玉伝寺もその一つで開進小学校の代替え施設として使われていた。地震発生時は昼休み時間で児童が外にいた。そこへ寺の東側の山が高さ 50m、幅 70m にわたって崩れ、2 人が生き埋めとなった。村人や消防団が総出で捜索したが、見つけ出すことはできなかった。この 2 人はいとこ同士であり、のちにいとこ地蔵を建てて供養したと伝えられている。この話は秦野市環境農政部防災課が 1982 年に発行した『関東大震災体験記』の名古屋の



図 6 玉伝寺にある供養塔

Fig.6 Memorial tower of Gyokuden-ji Temple in the East area.

井上千代吉の体験談にもある。

地滑りで埋まったところは現在広場となっており、その奥に、いとこ地蔵が地滑りを起こした山を背に立っている(図 7)。2 体の地蔵を刻んだレリーフには以下のように刻まれている。

(正面) 大岳悟了信士 真月恵光童女

(右側面) 大正十二年九月一日午前十一時四十五分大地震時右兩人此所二連没ス 俗名 小泉榮造 十八才 俗名 横溝イシ 十才

(左側面) 當山十四世覺林代造立者當寺檀徒 大木久米子

右側面に刻まれた 2 人の犠牲者の名前は、玉伝寺の供養碑の「落合」での犠牲者の中にもまた(1)の河原町児童公園の供養塔の「東秦野村」にも記載されている。また地蔵の横には由来を記す石板がある。

西坂(1926)や秦野市(1992)によれば、東秦野村では、金目川の上流域にあたる大山、春岳沢、ヤビツ峠にかけて地震による崖崩れが多発した。特に春岳沢兩岸の崩壊は激しく、土石が多くの地点で谷を埋め、金目川の流水を堰き止めた。このような状況のなかで 9 月 15 日の朝から夜にかけて大雨が降り、昼ごろ蓑毛で土砂が流失、消防団が出て氾濫への対応を試みたが、夜になって再度の土石流が発生し 15 戸の農家が埋没した。幸い夕刻に蓑毛橋付近の家の女性や子供が高台に避難していたこともあり死者の報告はない。玉伝寺のある名古屋や落合は蓑毛よりさらに 3km も下流に位置し、供養塔に刻まれた犠牲者とこの土石流とは直接の関係はないようである。



図 7 玉伝寺のいとこ地蔵

Fig.7 Itoko Jizo of Gyokuden-ji Temple in the East area.



図 8 太岳院にある本堂再建寄附者芳名碑

Fig.8 Monument of the contributors for reconstruction of the main hall of Daigakuin-Temple in the South area

(5) 太岳院本堂再建寄附者芳名碑(南地区)

曹洞宗亀王山太岳院の現住所は、秦野市今泉 391 番地で、小田急線秦野駅の南口から直線距離で南へ約 300m のところにある。隣接して湧水池のある今泉名水桜公園がある。寺の境内には、震災で倒壊した本堂の復旧に寄附金を寄せた人々の芳名碑がある(図 8)。碑には以下のような碑文が刻まれている。

(正面) 太岳院本堂再建寄附単

当時の住職の 200 円を筆頭に、合計 235 名による寄附金の額と氏名が記されている。

(裏面)

大正十二年九月一日関東大震災の為め當山本堂庫裡物置全潰山門半潰其の惨害甚し昭和二年春本堂再建の機縁成り十方の檀中及び有縁の浄財に依り昭和三年三月廿九日上棟式を挙げ昭和四年十月落成を見る茲に永く記念の為め録す

(読みやすいように片仮名を平仮名に直した)

昭和四年十二月吉日建之

亀王山太岳院十六世安本正淳代

と、当時の住職によって、再建の由来が記されている。さらに続いて

一. 工事人夫延人員七百四十五人寄附 今泉及今川町檀中

と書かれ、「檀徒総代」として 6 名、「世話人」として 20 名の氏名が記載され、最後に「當村今川町 石徳刻」と、石工の名前が刻まれている。

裏面の由来によれば、震災でこの寺は本堂、庫裡、

物置が全潰、山門が半潰という大きな被害を出し、1927(昭和 2)年に本堂再建を決定し、檀信徒などから浄財を募り、1928(昭和 3)年に上棟式を挙げ、1929(昭和 4)年に完成した。その次の記述から、建設に当たっては、地元今泉や今川町の檀信徒は、寄付金だけでなく、延べ 745 人の労働力も提供したことが分かる。あとでも出てくるが、復旧にかかわる土木工事などにも地元住民は労働力を提供した。なお、再建された本堂は今は無く、建築家安藤忠雄の設計でモダンな姿に生まれ変わっている。

(6) 震生湖畔寺田寅彦句碑(南地区)

秦野市の南部、秦野市今泉の中井町との境界に接して、周囲約 1km の小さな湖がある。震生湖である[秦野市市史編纂室(1987)]。関東地震による土砂崩れでできた湖で、最大水深は約 10m あり、震災後 90 年近くが経つ現在でも満々と水をたたえている。その湖畔にあるのが、東京帝国大学地震研究所の所員として調査に 2 度現地を訪れた寺田寅彦の句碑である(図 9)。碑には以下のような碑文が刻まれている。

(正面) 山さけて 成しける池や 水すまし

(裏面) 碑の句は、故理学博士寺田寅彦先生で、

書は漱石同門の現学習院大学教授小宮豊隆先生である。

昭和三十年九月一日 秦野市



図 9 震生湖畔にある寺田寅彦の句碑

Fig.9 Monument of a haiku composed by Torahiko Terada at the lake side of Shinsei-ko in the South area.

寺田寅彦は1930(昭和5)年に2度にわたって現地を訪れて調査を行っている。2度目は同じ地震研究所の宮部直巳と津屋弘達を伴って来ている。調査結果は寺田・宮部(1932)として地震研究所彙報に報告されている。寺田寅彦は調査の際に3つの俳句を詠んでいる。1955(昭和30)年9月1日の震災記念日に句碑が建立されたが、その際どの句を刻むかで、寺田と俳句で同門だった当時学習院大学教授の小宮豊隆に相談したところ、「山さけて」という部分に地震の恐ろしさがよく表れているというので、この句が選ばれたという[秦野市市史編纂室(1987)]。図10は震生湖の現在の様子である。

震生湖は、地震によって渋沢丘陵にあった南市木の山林及び畑の一部が、幅約250mにわたって馬蹄形に崩壊し、その土砂が市木沢の谷を埋め、市木沢に流れていた小川を堰き止めたため、水が溜まって湖となったものである。図11はその様子を描いた1928(昭和3)年の『神奈川県中郡南秦野村郷土誌』掲載の図である[秦野市市史編纂室(1987)]。崩れた土砂が市木沢の谷を埋めその上流部に震生湖ができた様子がよくわかる。

また崩壊直後の様子は、落合(1925)に書かれており、以下にその一節を引用する。

「先ず中郡下に於て第一の地形変化は南秦野町村今泉上市木より後くぼにまたがり、深さ四丈餘、四方各二十五間の大陥没であらう。こゝには従来一つの川が流れて居たが大陥没の折、二つに割れて崩れた小山の為に嚴重なせぎを作られてしまったの

である。

それが為め陥没の上右端には日々流れ貯る木に依って、減る事の無い大池が出来て、丈余の杉の大木が僅かに其先端だけ現している。青い水は其深さを沈黙のうちに證明し、周囲の断崖は今にも崩れさうな形をなして實に悽愴な感じを抱いて居るのである、もしこの水をこのまゝ自然にまかせて置けば、こゝに貯る水は次第に大陥没地に流れ込んで来る事は明かで、名勝秦野湖として舟の浮ぶのも遠い将来ではあるまいと思ふ。」

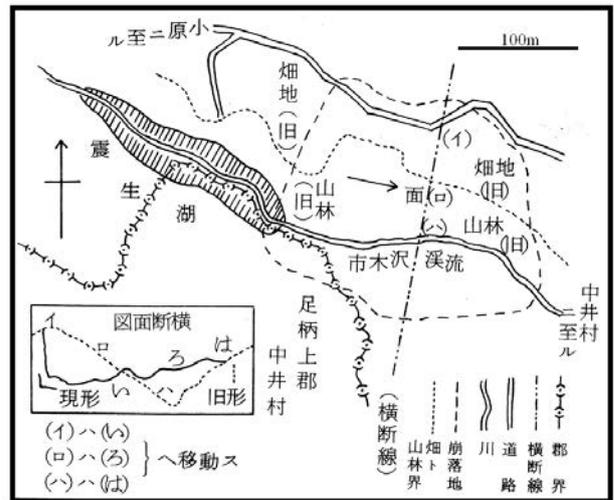


図11 震生湖の出来た様子[秦野市市史編纂室(1987)掲載の1928年の図に加筆]

Fig.11 Process of making up Shinsei-ko Lake by the Ichikizawa landslide.

この時点(大正14年以前)ではまだ震生湖という名前は出てこないが、図10が掲載されている『神奈川県中郡南秦野村郷土誌』が出た昭和3年時点では震生湖という名がみられる。名前の由来について、秦野市市史編纂室(1987)では幾つかの説を紹介したうえで「地元の今泉の人達の話し合いの過程で、その創意により命名され、その名が次第に多くの人に親しまれて言い伝えられてきたと思われる。」と結論づけている。

(7) 平沢埋没者供養塔(南地区)

震生湖が生まれる原因となった土砂崩れに巻き込まれて犠牲になった少女の供養塔が、秦野市平沢1804番地にある。震生湖の駐車場脇の林の中である(図12)。碑には以下のような碑文が刻まれている。



図10 現在の震生湖

Fig.10 The present state of Shinsei-ko Lake in the South area.

(正面) 殊顔妙艶童女

大震災埋没者供養塔

仙顔妙蓉童女

(裏面) 大正十二年九月一日

山口丑五郎四女ヨネ 行年十三歳

山口叅蔵三女トク 行年十一歳

南秦野村有志一般建立

少女達は当時、南秦野尋常高等小学校の児童であった。同小学校は現在の秦野市立南小学校である。秦野市市史編纂室(1987)によれば、地震当日の9月1日は、土曜日で二学期の始業式の日であったが、少女2人の家があった平沢の小原地区では、少女達が学校から帰らないというので大騒ぎになった。すぐに目撃者を探したところ、地震の起こる少し前に少女が峰坂付近を登っているのを見たという人が現れた。峰坂は現在の南小から駐車場方面へ登る坂であり小原地区への帰り道にあたる。そこで、学校の先生や消防団、地元平沢の住民たちが、数日間にわたって土地を掘り起こして捜索にあたったが、遺留品など何一つ発見できなかった。また、その後も在郷軍人会や青年団が10月26日から12日間、11月24日から10日間、崩落現場を約60間(約109m)の幅で発掘したが結果は同じであった。

翌1924(大正13)年10月1日に、南秦野村の人々によって2人の少女のために建てられたのがこの供



図12 市木沢で犠牲になった少女2人を祀る平沢埋没者供養塔

Fig.12 Memorial tower of two girls buried under earth and rocks from the Ichikizawa landslide in the South area.

養塔である。南秦野村では、地震直後の9月12日付で南秦野村役場、同軍人会、同青年会が「南秦野村震災被害概要」(南発第十七号回章)[秦野市(1986)]をまとめている。その死亡人員の合計は26名となっており、少女2人の名前が確認できる河原町児童公園の慰霊碑に刻まれた数と比べると2人少ない。2人の少女はまだ捜索中で死亡者には入っていなかったことが分かる(このまとめには行方不明者の区分はない)。一方、その後にもまとめられた『秦野誌並に震災復興誌』[落合(1925)]の警察署の統計では、南秦野村の死亡者は26名、行方不明者は2名となっており、2人の少女は行方不明者に数えられていることが分かる。

震生湖は現在秦野市市民の憩いの場として休日にはにぎわっているが、この湖が生まれる過程で、いたいけな2人の少女が犠牲になったことも忘れて欲しくないと思う。

(8) 菩提復旧記念碑(北地区)

記念碑のある場所は、秦野市菩提字横手1604番地で、地元では大イチョウがあることでよく知られている菩提会館前の広場である(図13)。1889(明治22)年に北秦野村が成立して以来、関東大震災で倒壊するまで村役場が置かれていた。大イチョウの前にある復旧記念碑には以下のような碑文が刻まれている。

(正面) 復舊記念碑

維持大正拾貳年九月壹日突
如関東地大震瞬時奪幾萬年
靈數拾億財貨亦歸烏有本村
慘害極激甚倒懷家屋社絶交
通為鉄乏衣食加以接續震泥
山獄亀裂崩落無算嘗比時官
民協力應急施設而百般事業
各謀復興就中荒廢地復旧面
積約壹百町歩挨國費金拾壹
萬五阡圓爾來七星霜有志指
導得宣今治近完成矣茲從業
員相謀建碑以紀念之後世焉
相原太郎吉撰並書

(裏面) 有志一同

担當主任農林技手 松尾棹

現場監督主任主事 (名前:判読不能)

惣代 相原亮治

引き続き6名の名前が刻まれている(うち1名は石工)。

以下に28名(1名は判読不能)の名前が刻まれている。最後に「世話人」として8名の名前が刻まれている(うち1名は石工)。

昭和五年九月一日 建設

(注) 秦野市(1987)に記載された碑文では正面の文章の最終行の「之」が「乏」と誤っている。また、裏面の28名の名前が26名(うち1名は判読不能)しか記載されていない。

この復旧記念碑の碑文中、重要な語句は、正面碑文の5行目から6行目にかけての「震泥山嶽亀裂崩落」と8行目の「荒廢地復旧」である。秦野市市史編纂室(1985)によれば、地震直後の菩提地区を知る住民の話として「1923(大正12)年の関東大震災では、山の3分の2が赤はだかになった。大平台は禿山になり、茅場は半分くらい崩れてしまった。」と当時の様子が記載されている。茅場とは、屋根を葺くための茅を採取する場所である。大平台は葛葉川上流の丹沢山系の山の一つで、碑のある場所からもよく見える。

また、秦野市(1992)には「地震により葛葉川上流の大沢、大音沢、滝の沢の両岸が大きく数十か所にわたり崩壊した。土石が谷川の水を堰止め、谷は数か所にわたり溜池のようになってしまった。・・・地震後しばらくは、村落内を流れる河川の水量が地震前より少なくなった。」と書かれている。地元住民は、河川の氾濫を予測して対応を試みたが、9月14日から15日にかけての豪雨で土石流が発生した。住民は高地に避難して死者はでなかったが、住宅や田畑には大

きな被害を出した。丹沢山系からの土石流で菩提において農家が流失・埋没したという記録は西坂(1926)にもある。菩提地区には土石流の名残として今でもおおきな石が転がっているという[秦野市(1992)]。

北秦野村には地震以後の村の対応を記す「震災日誌」が残されており、秦野市(1986)で翌年12月までの記録をみることができる。それによれば、9月15日の午後11時時点の被害は、菩提地区で流失家屋11、泥没家屋17、浸泥田流失4町歩、同畑流失1町5反、羽根(はね)地区で泥没家屋2、浸泥田1町歩、同畑1町歩と記載されている。またさらに24日の暴風雨で、菩提地区で3戸、横野地区で1戸、戸川地区で4戸の住宅に被害が出、それまで半潰だった小学校校舎も大破倒壊した。学校はその後復旧に努めるが翌年1月15日の丹沢地震で再び半潰状況になる。その際住宅も多数半潰した。さらに震災1周年を過ぎた9月16日にも「夕刻より出水被害甚だし」との記録がある。

被害はこれでおさまったわけではなかった。秦野市(1992)によれば、北秦野村の事業報告の記載として、1925(大正14)年には「八、九月の大雨により、再び道路・橋梁・治水の破壊を来たし」とあり、1928(昭和3)年には「七月三十一日より八月月上旬にわたる暴風雨のため、葛葉川の氾濫は震災より以上の被害をみ」とあるという。いずれも葛葉川上流部の崩壊、泥土流の氾濫によるもので、地震による山地崩壊の影響が続いていたことをうかがわせる。

また、秦野市(1992)は、村の有志が昭和3年の被害に対して、地元では手に負えないので、県の直営工事を望む運動を起こしたこと、さらに村の財政状況が関東大震災後一変して悪化する大きな原因の一つが、震災後頻発する土石流災害であったことを指摘し、秦野地方の他町村でも程度の差こそあれ共通する状況であったと述べている。「震災日誌」を見ると、被害の後片付けや復旧工事には、地元住民の多くが駆り出されたことが分かる。菩提会館前の復旧記念碑の建立は、1930(昭和5)年9月1日であり、震災から7年間の地元住民の荒廢地復旧への苦闘の歴史を物語るものであろう。

(9) 戸川復興記念碑(北地区)

同じ北地区の菩提会館からほど遠くない秦野市戸川983番地にも復興記念碑がある(図14)。記念碑には以下のような碑文が刻まれている。



図13 菩提会館前の復旧記念碑

Fig.13 Monument of the restoration in front of the Bodai community center in the North area.



図 14 戸川にある復興記念碑.

Fig.14 Monument of the restoration at Togawa in the North area.

(正面) 復興記念

天者偉大也故其応報亦深甚也難忘大正十二年之震災者覆地軸破滅萬物慘狀絶筆紙矣然而其尤極困憊者給水之途絶也本大字者水路一途依而以繋戸数百五十人口一千命脈然干之而一度渴歟事総而休也於茲有志桐山喜八君飯沼福太郎君等卒先大唱字民一般亦和服一致其局耕地整理法施行之浴恵澤精励努力開溝渠便水利不啻救窮極延而至潤田禾吁其業誰輕視哉今人者自曷繁知之後人亦沾被其德不閑傳然聯記大要刻碑更資其又後人想起爾

昭和三年五月吉日建之 戸川三屋中

(裏面)

耕地整理組合長 桐山喜八
 全副組合長 飯沼福太郎
 全評議員 (16名の名前を記す)
 全幹事 (12名の名前を記す)
 土工 (7名の名前を記す)

(注) 秦野市(1987)に記載された碑文では正面の由来を記す文章中、2行目冒頭の「之」が空欄になっている。8行目6字目「而」の次に「至」が抜けている。また、裏面の「全幹事」の名前が一名抜けている。

碑文の大要は、震災で給水が途絶して大字戸川の150戸1千名が困り、桐山喜八、飯沼福太郎等を中心に有志の人々が耕地整理法施行に浴して、一致協力して水路を開いた。その業績を後世に伝えるというような内容であろうか。耕地整理組合長の桐山

喜八と副組合長の飯沼福太郎は、先に述べた北秦野村の「震災日誌」で、震災後の様々な対応を話し合うためにたびたび会合がもたれた大字惣代・村会議員の協議会のメンバーとしてその名が見える。

(11) 堀之郷正八幡宮復旧記念碑(西地区)

記念碑は、秦野市堀山下 998 番地の堀之郷正八幡宮の鳥居をくぐってすぐのところにある(図 15)。記念碑には以下のような碑文が刻まれている。

(正面) 震災復舊記念

以下寄付をした人の名前と寄付金額が地区別に書かれている。書かれている順序どおりに地区と人数を記すと以下の通りである。

堀山下 116 人、堀川 14 人、堀西森戸 32 人、堀西波多川 32 人、堀西黒木欠畑 39 人、堀山下 56 人、堀川 63 人、堀西 34 人、横浜市 1 人、山梨県 1 人、堀川 1 人の合計 389 名である。

(裏面) 大正十五年二月吉祥日

社司 村上正平
 氏子総代 (6名の名前を記す)
 大世話人 (2名の名前を記す)
 世話人 (24名の名前を記す)
 復興委員(7名の名前を記す)

以下、石工1名、大工1名、鳶職2名、石工1名が記されている。



図 15 堀之郷八幡神社の復旧記念碑.

Fig.15 Monument of the restoration at Horinogo-Hachiman Shrine in the West area.

西秦野村には、村でまとめた震災による死亡者名簿があり[秦野市(1986)], 住んでいた大字, 戸主名, 本人名と生年月日が記されている。それによれば大字毎の死者は、堀山下で3人, 堀西で6人, 堀川で2人, 千村で8人, 渋沢で3人の計22名である。表2の死者数との不一致の理由はよくわからない。西秦野村は、東は水無川で北秦野村と接し、西は四十八瀬川で上秦野村と接する南北に細長い地域である。丹沢山系の主峰の一つである塔ノ岳の麓から大字で堀山下, 途中四十八瀬川側が堀西, 堀川となり, その下流が千村, 渋沢と続く。四十八瀬川を挟んで堀西と千村の対岸が上秦野村の大字菖蒲である。

秦野市(1986)には、千村の石井家に伝わる「大正拾貳年大地震記」なる記録があるが、そこには千村での被害を中心に翌年1月までの復興の様子などが細かく書かれている。この記録中で上記千村の死亡者8人中7人の様子も確認できる。いずれも本震時の揺れによる建物の倒壊によって亡くなったものである。また、この記録には9月15日の大雨による洪水のことも書かれている。それによれば、土砂崩落などもあって四十八瀬川があふれ、大字菖蒲や千村で水田の流失があった。また、9月17日にも大雨があり、堀山下の大倉は大部分が水没して堀一帯の消防夫全部が出動する騒ぎとなったと書かれている。

西秦野村でも北秦野村ほどではないにしても、地震による直接の被害だけでなく、その後の大雨に伴う土石流災害の影響を受けたと推定される。西坂(1926)には15日の豪雨に関連して「西秦野村千村塔ヶ嶽支脈高山の一角にも山津波を起こしたが、同所付近に人家がないので被害はなかった。」と書かれている。死者こそなかったものの、田畑には相当の被害が出た可能性がある。1926(大正15)年2月に建立された堀之郷正八幡宮の復旧記念碑は、これら全ての被害から堀山下, 堀西, 堀川地域が立ち直ったことを記念するものであろう。

§4 おわりに

昨年の神奈川県平塚市について神奈川県秦野市に残る関東大震災の慰霊碑や記念碑など震災の跡を巡り、由来など周辺を調査した。その結果、秦野市域では地域によって被害の様相が異なり、揺れによる建物被害の大きい地域、それに続いて火災を起こした地域、さらには土砂災害による被害が大きい地域があることが明らかになった。特に土砂災害は地震から十年近くたっても大雨のたびに土石流を引き起こ

し、地域に大きな影響を与え続けたことが分かった。

これらのことは、すでに震災誌や震災の体験談、さらには秦野市史などの郷土史料や郷土の自然誌などに断片的に書かれていることが多いが、現地に残された慰霊碑や記念碑を通じてそれらを統合し、現代に蘇らせることが重要との思いで本稿をまとめた。

今後、地震防災を目指す住民の方々に広く本稿を紹介し情報を提供して、住民の防災意識の向上に向けた活動の一助になればと願っている。

なお、調査に協力いただいた「はだの災害ボランティアネットワーク」は、秦野市が大規模災害で被害を受けたときに、秦野市役所、秦野市社会福祉協議会と協働で、災害救援ボランティアセンターを開設するために、2005年に結成された市民団体で、日常は市民の防災意識や知識の向上をはかる活動ならびに防災訓練を通じてグループのスキルアップを行っている。その際、防災意識や知識の向上に本資料を役立ててもらおうつもりである。

また2010年12月の再調査の際には、すでに武村・篠原(2010)を活用した活動をしている隣接の平塚市にある「ひらつか防災まちづくりの会」のメンバーも参加して、慰霊碑や記念碑を通じた地域間の交流も実現した。

本稿でまとめた慰霊碑や記念碑は、秦野市にとって震災の記録として重要なものであるが、他の地域と同様に、この種のもは次第に忘れ去られ消滅する危機もはらんでいる。このような中で少しでも住民の方々の意識の中に慰霊碑や記念碑が生き続けることは、これら貴重な遺産を守る上でも重要なことと確信する。

謝辞

秦野市内の調査について、「はだの災害ボランティアネットワーク」代表の森清一氏に現地の案内をお願いした。同行していただいた3名のメンバーの方々も含めて感謝申し上げます。

また、査読者には本稿で示したような活動に対して共感するコメントをいただくと共に、原稿の改善について貴重なご意見をいただいた。記して感謝申し上げます。

対象地震：1923年関東地震

文献

秦野市, 1977, 秦野郷土のあゆみ, 215pp.

秦野市, 1986, 秦野市史第五卷 近代史料2, 943pp.
秦野市, 1987, 秦野の記念碑, 193pp.
秦野市, 1992, 秦野市史通史編 3 近代, 806pp.
秦野市, 1998, 丹沢山のものがたり, 218pp.
秦野市環境農政部防災課, 1982, 関東大震災体験記, 49pp.
秦野市教育研究所, 1994, 改訂版 秦野盆地の地質, 100pp.
秦野市教育研究所, 1998, 秦野の近代遺産, 研究紀要第 57 集, 127pp.
秦野市市史編纂室, 1985, 秦野の自然 II, 秦野市史自然調査報告書 2, 173pp.
秦野市市史編纂室, 1987, 秦野の自然 III: 震生湖の自然, 秦野市史自然調査報告書 3, 155pp.
諸井孝文・武村雅之, 2004, 関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定, 日本地震工学会論文集, 4, 4, 21-45.
内務省社会局, 1926, 大正震災志(上巻), 1236pp.
西坂勝人, 1926, 神奈川県下の大震火災と警察, 警有社, 496pp.
落合政一, 1925, 秦野誌並に震災復興誌, 259pp.
武村雅之・篠原憲一, 2010, 神奈川県平塚市での関東大震災の跡—慰霊碑巡礼の記録, 歴史地震, 25, 91-100.
寺田寅彦・宮部直巳, 1932, 秦野に於ける山崩, 東大地震研究所彙報, 10, 192-199.